

接触場面の意見交換会話における会話参加の様相  
－発話の長さと言話機能に着目して－

小 松 奈 々\*

The Nature of Participation in Conversations between Native and  
Non-native Speakers :  
Focusing on Length of Speech and Speech Functions

KOMATSU Nana

Abstract

In this paper, an analysis of the differences in participation between small talk and discussions by Japanese native speakers and non-native speakers was conducted with regard to the length of speech and the proportion of speech functions. With regard to the length of speech, the results showed that the length of speech is longer in discussions than in small talk as was found when speakers were speaking in their native language. With regard to the proportion of speech functions, the results showed that there was a high proportion of information-sharing functions such as requesting and providing information in small talk, while sharing opinions, going beyond simple information-sharing functions to information-synthesizing/manufacturing functions, occupies an important position in discussions. In addition, with regard to the roles of the participants in conversations, it was found that the tendency for native speakers to play the role of the interviewer for non-native speakers was maintained in discussions.

From these results, it is inferred that thorough information-sharing is important before sharing opinions in discussions, and it was suggested that there is a necessity for instruction which places importance on the flow from information-sharing to opinion-sharing and speech as a listener of non-native speakers.

Keywords: discussion, small talk, participation of conversation, speech function, role of speaker

1. はじめに

日本語教育においては、一般的に「上級の壁」と言われるように、中級学習者が上級レベルに上がれずに停滞するという現象が見られる。この一つの原因として、話題の抽象度が指摘されている。言語運用能力の指標である『ACTFL 言語運用能力基準』（バック 1989）では、中級から上級、超級へとレベルが上がるにつれて具体的な話題だけではなく抽象的話題についても扱えるという基準が示されている。つまり、中級学習者が上級へとステップアップするためには、社会問題などの自分の身近ではない話題についても扱えることが一つの鍵になると言えよう。このような話題を扱う会話スタイルとして、意見交換会話が挙げられる。意見交換会話は、自分が常に話し手でいられるわけではなく、同等な立場で参加している会話参加者の話を聞かなければならないという点

---

キーワード：意見交換会話，雑談会話，会話参加，発話機能，話者の役割

\*平成22年度生 比較社会文化学専攻

でスピーチやインタビューとは異なる。そこでは、話し手と聞き手の役割が頻繁に交替しながら会話が進んでいく。そのため、円滑な意見交換会話を達成するためには、自分がうまく話すだけでなく、会話相手の話をよく聞き、その内容を踏まえた発話をするという難易度の高い言語行動が要求される。

本研究では、意見交換会話に会話参加者が話し手としてまた聞き手としてどのように参加し、どのようなバランスの上で会話を達成しているかを探る。そして、その参加の仕方は話題の抽象度の低い雑談会話と異なるのかどうか、また、非母語話者と母語話者では特徴がどう異なるのかに注目して分析をする。これらを明らかにすることで、「どう話すか」だけではなく、やりとりの中で「どう話し、どう聞くか」という視点からの中級学習者の指導に示唆を得ることを目指す。

## 2. 先行研究

### 2.1 会話の種類と会話参加の関係

会話の目的によって会話のスタイルが異なるということについては、早くから指摘がなされてきた。Brown and Yule(1983)では、会話は報告的機能を持つものと相互作用的機能を持つものに大別されると主張されている。また、藤本ほか(2004)は、Tannen(2001)のリポート・トークとラポート・トークという概念を会話場面に置き換え、討論では情報のやりとりが中心となるリポート・トークが求められ、雑談では会話参加者同士の心的つながりが重視されるラポート・トークが求められていると述べている。

会話の目的によって会話参加の仕方がどう異なるかについての研究は、母語場面研究と接触場面研究に分けられる。母語場面では、浦ほか(1986)は、発話機能の出現比率から会話参加の特徴を明らかにした。その結果、目的を持たない会話、情報交換のための会話、問題解決のための会話の3種のうち、問題解決のための会話では目的が明確でない他2種の会話より意見を述べたり評価をする発話が多く、情報のやりとりの頻度は低い傾向が見られた。母語話者の三者間会話による雑談会話と討論会話を比較した藤本ほか(2004)によると、討論会話では発言数は少ないが一回の発話による発話量は多い傾向が見られた。また、会話展開に関して情報が次々に付け加えられることで内容が変化していく雑談と比較して、討論会話では議論の内容を深めたり逆に要約したりするといった「会話の深度」に関する発言が多いという特徴が示されている。以上のように、母語場面においては会話の目的によって会話への参加の仕方が異なることが明らかにされている。

一方で、接触場面研究としては、母語話者側の発話にフォーカスを当てた一二三(1999)が挙げられる。目的のない会話として雑談を、目的のある会話として旅行計画を立てるといった会話を設定し、それぞれの会話での発話の特徴を明らかにした。目的のある会話では意味交渉と意見述べの発話を多く用いており、母語場面での先行研究同様、接触場面においても会話の目的によって会話参加の仕方が異なることが示されている。

### 2.2 接触場面の初対面会話における会話参加

接触場面において会話参加者がどのように会話に参加しているかに関しては、初対面会話を中心に明らかにされてきた。佐々木(1998)は、母語場面ではお互いが意見や感想を述べ合う「話し合いスタイル」をとる傾向が見られるのに対し、接触場面では母語話者が非母語話者に質問していく「インタビュースタイル」をとる傾向が見られることを報告している。同様に、中井(2003)では、話題開始の仕方について母語場面と接触場面で比較した結果、接触場面において母語話者が非母語話者へ一方方向的に質問をする会話型が見られたとしている。このように、複数の先行研究において会話参加者間の参加の仕方の違いが指摘されている。

以上の先行研究からは、母語場面あるいは接触場面の母語話者の発話には会話の目的によって異なる会話の枠組が存在すること、また、初対面会話においては非母語話者と母語話者の会話参加の仕方が異なることがわかる。しかし、接触場面での非母語話者も母語場面と同様の特徴を持つのか、そして意見交換会話においても初対面会話と同様の役割の差異が見られるのかは明らかになっていない。さらに、本研究で扱う意見交換会話は、必ずしも会話参加者同士の意見の一致を目指すものではなく、双方の考えを深めるために行う意見のやりとりを含む会話であり、「会話参加者間に統一見解を見出すための討論会話(藤本ほか2004)」とは目的が異なり、特徴も異なると考えられる。

### 3. 研究の目的と課題

本研究の目的は、接触場面の意見交換会話において非母語話者および母語話者がどのように会話に参加しているかを探ることである。参加の様相を表す指標としては、母語場面の先行研究（浦ほか1986、藤本ほか2004）を参考に、発話の長さおよび発話機能の比率に注目した。研究課題は以下の2点である。

研究課題1：接触場面の意見交換会話と雑談会話の比較において、意見交換会話では母語話者および非母語話者による発話の長さにどのような特徴が見られるか。

研究課題2：接触場面の意見交換会話と雑談会話の比較において、意見交換会話では母語話者および非母語話者による発話機能の比率にどのような特徴が見られるか。

### 4. 研究方法

#### 4.1 調査の概要

データは2009年4月から6月、都内の女子大学において収集された30組分の接触場面会話である。被験者は日本語母語話者（以下NS）と韓国語を母語とする日本語非母語話者（以下NNS）である。NSはこの大学に所属する大学生および大学院生であり、NNSはこの大学の留学生（正規、交換留学、研究生等）のほかに、ワーキングホリデーで滞在中の者も含まれている。また、ペアごとの親しさを統一するために両者を初対面に設定した。NNSの日本語学習レベルは、意見交換の会話にも対応できることを想定して、旧日本語能力試験2級取得以上で、学習歴2年以上とした。調査手順は、まず、「自由に話してください」と教示し、雑談会話を15分間録音した。終了後すぐに調査者の介在のもと、意見交換のテーマを決めてもらった。このとき、どちらか一方にのみ興味のあるテーマとならないよう、テーマを複数提示し、個別に第二希望までテーマを選択した後互いに照らし合わせ、双方が関心を持っているものを協議の上決定してもらうようにした。意見交換のテーマは、具体的な内容に終始しない抽象的なテーマであることに留意し、次の6種類を提示した。

〈本研究で用いた意見交換のテーマ〉

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>① 大学では学問そのものが重視されるべきか、就職の準備教育が重視されるべきか</li> <li>② 女子大学は必要か</li> <li>③ 企業で女子社員を一定数雇用する制度に賛成か</li> <li>④ 子供の教育方法として、1つのものを集中的に伸ばすことと広く色々な経験をさせることとどちらが大事か</li> <li>⑤ 国際結婚に賛成か</li> <li>⑥ 少年犯罪の原因は家庭にあるという意見に同意するか</li> </ul> |
|---|

テーマ選択後、「お互いの意見が同じ場合も違う場合も、相手の意見をよく聞いて自分の意見を話すようにしてください。お互いの考えを深めるような意見交換にしてください」と教示し、意見交換の会話を15分間録音した。本研究が対象とするデータは、調査前半の雑談会話30組分と調査後半の意見交換会話30組分、計900分のデータである。

#### 4.2 分析手順

まず、録音された会話を「トランスクリプトに用いられる記号」（串田ほか2007）の規則に従い文字化した。研究課題1の発話指標としては、「単一発話中モーラ数」を用いた。これは、15分間に話された全発話をモーラ数で換算した後、発話の回数で除したものである。発話は、一人の発話者がもう一人の発話者に代わるまでを1発話とした。一方が話しているとき会話相手が割り込んだために話が途切れた場合、そこまでを一つの発言機会

と考え1発話としてカウントした。相づちは、会話相手との発話の重なりがない場合は1発話とみなしたが、相づちによって会話相手の発話が途切れないものは相手の発話に影響しないものと考え、分析対象外とした。モーラとは拍のことであり、相づちや返事など単語では表せない発話まで数値化することができる。モーラ数算出には、漢字-かな変換プログラム「ゆみここ (<http://www.geocities.co.jp/ymcc0000/>)」を使用した。本研究ではこの単一発話中モーラ数を会話種類および会話参加者ごとに算出した。

次に、研究課題2では、研究課題1で区分した各発話をその発話をもつ機能ごとに分類した。コーディングには一二三(1999)の発話カテゴリー(表1)を使用した。これは、会話を情報の共有と情報の合成・加工という2つの区分で捉えた浦他(1986)が提案した発話カテゴリーを接触場面データの分析に合わせて修正したものである。以下に各発話機能について説明する。

まず、上位カテゴリーとしてIS(情報の共有)、IP(情報の合成、加工)、NSP(相づち、実質的内容のない発話)、NR(無反応、沈黙)が設定されている。浦他(1986)では、会話は、何らかの目標に接近するために、各会話者が個人的に持つ情報を互いに提供し合うことによって一定量の情報を共有(IS)し、それらを合成・加工する(IP)相互作用過程であると考えられている。そこで、4種の機能のうち特にこれら2種の出現傾向から、会話の目的および特徴を探ることができると考えた。そしてISの下位カテゴリーとしてQ(情報要求)、INF(情報提供)、NM(意味交渉)の3種類、IPの下位カテゴリーとしてOP(意見)、EV(評価)の2種類が設定されており、これにより具体的な会話の傾向を明らかにできる。コーディングに際しては、該当発話を聞き手がどのように認識しているかに留意しながら分類した。次の分類例のうち、発話3は途中で発話が途切れているが、続く発話4でのNNSの発話「はい」という応答から発話3が質問であったと判断し、情報要求(上位カテゴリー: IS/下位カテゴリー: Q)として分類している。

分類例)		(:は音の引き伸ばし、hは笑いを表す)
1 NS	わ じゃあずっと 韓国から:来られて1年目なんですか?	←IS/Q
2 NNS	あそうですね えっと去年の4月にここに来たので 1年4か月ぐらい	←IS/INF
3 NS	お:: えそれまで日本語ってしゃべれ	←IS/Q
4 NNS	あ はい 勉強はしました はい	←IS/INF
5 NS	なるほど だからなんですかね すごい なんかhhペラペラだと思って	←IP/EV

本研究では、中級レベル以上の日本語能力を持つ非母語話者が対象となっているためか、無反応は見られなかった。また、一つの会話に参加するNNSとNSの双方を対象とするため、両者による沈黙をどちらかの話者にコーディングすることは難しいと判断した。そのため、NRは本研究の分析から外した。したがって研究課題2では、上位カテゴリー3、下位カテゴリー5の計8つの発話機能を分析対象とする。発話機能への分類の信頼性については、発話総数の20%を無作為に選び、筆者および協力者1名が別々に区分したものを対照したところ、一致率は94.7%であった。一致しなかったものは再度検討し、最終的に2名の合意により全て分割、分類された。

表1 一二三(1999)による発話カテゴリー

上位カテゴリー	下位カテゴリー
IS (Sharing Information : 情報の共有)	Q (Question : 情報要求)
	INF (INformation : 情報提供)
	NM (Negotiation of Meaning : 意味交渉)
IP (Processing Information : 情報の合成・加工)	OP (OPinion : 意見)
	EV (EValuation : 評価)
NSP (Not Sharing nor Processing : 相槌、実質的内容なし)	—
NR (Non Reaction : 無反応、沈黙)	—

### 4.3 要因計画

研究課題1では、会話参加者(NNS/NS, 2水準)×会話の種類(雑談/意見交換, 2水準)の二要因計画の分散分析を行う。会話参加者は被験者間要因、会話の種類は被験者内要因である。

研究課題2では、会話参加者(NNS/NS, 2水準)×会話の種類(雑談×意見交換, 2水準)×下位カテゴリーにおける5種の発話機能(Q/INF/NM/OP/EV, 5水準)の三要因計画の分散分析を行う。会話参加者は被験者間要因、会話の種類および発話機能は被験者内要因である。

## 5. 結果

### 5.1 発話の長さ

単一発話中モーラ数について、会話参加者(2)×会話の種類(2)の二要因分散分析を行った。その結果、交互作用は見られず( $F(1,58)=0.72$  *n.s.*)、会話の種類の主効果に有意差が見られた( $F(1,58)=61.41$   $p<.01$ )。会話の種類および会話参加者別の単一発話中モーラ数の平均値および標準偏差は表2の通りである。

雑談会話ではNNSが35.84、NSが32.17であるのに対し、意見交換会話ではNNSが56.19、NSが57.49と、会話の種類間に20モーラ以上の差があり、意見交換会話では一回の発話が雑談会話と比較して長いことがわかる。この結果は、母語場面の雑談会話と討論会話を比較した藤本ほか(2004)の結果を支持するものであり、接触場面においても同様に、一つのまとまった内容を話すために一回の発話が長くなるという特徴を持っていることがわかった。一方で、それぞれの会話におけるNNS、NSの単一発話中モーラ数の平均値に有意な差は見られず、両者の発話量は均衡していることが明らかになった。続く研究課題2では、会話の種類間、そして会話参加者間に発話機能の傾向の差異が見られるかを探るため、発話機能の出現比率の比較を行う。

### 5.2 発話機能

#### 5.2.1 上位カテゴリーの結果

まず、発話カテゴリーのうち上位カテゴリーにおける3種の発話機能別平均出現率を算出した(図1)。その結果、雑談会話では情報の共有機能をもつ発話がNNSで0.75、NSで0.68と7割以上ないし7割近くを占めてい

表2 会話の種類および会話参加者別の単一発話中モーラ数平均値

	雑談会話		意見交換会話	
	NNS	NS	NNS	NS
平均値	35.84	32.17	56.19	57.49
(標準偏差)	(13.82)	(11.86)	(23.29)	(32.72)

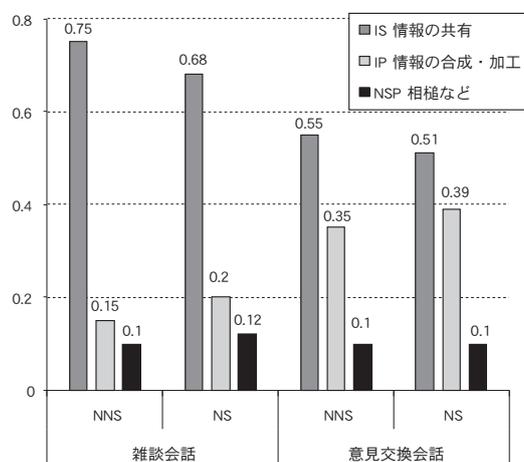


図1 上位カテゴリーの平均発話比率

るのに対し、意見交換会話ではNNSで0.55、NSで0.51と約半分に留まっていることがわかった。反面、意見交換会話においては情報の合成・加工機能をもつ発話がNNSで0.35、NSで0.39と全体の3割を超えている。また、相づちなど実質的な意味を持たない発話は両会話種類、両会話参加者とも0.1台と共通していた。このことから、雑談会話は情報の共有が主な目的であるのに対し、意見交換会話は情報の共有に加え情報の合成・加工をすることまでが目的となっており、会話の深度という点で見ると雑談会話より複雑な構造を持っていることが窺える。具体的にどのような発話機能が用いられているか、さらに詳しく検討するため、次項では下位カテゴリーにおける5種の発話機能の分析を行う。

### 5.2.2 下位カテゴリーの結果

上位カテゴリーでは各発話機能の出現比率に話者間の著しい不均衡は見られなかったが、下位カテゴリーの比較においては両者に大きな差異が見られた。各発話機能における発話出現比率の平均値は図2の通りである<sup>1</sup>。平均発話比率について会話参加者(2)×会話の種類(2)×発話機能(5)の三要因分散分析を行った。その結果、二次の交互作用は見られず( $F(4,232) = 0.52$  *n.s.*)、会話の種類×発話機能および会話参加者×発話機能において一次の交互作用が見られた( $F(4,232) = 68.3$   $p < .01$ )( $F(4,232) = 30.98$   $p < .01$ )。

下位検定の結果、雑談会話と意見交換会話の次のような差異が明らかになった。雑談会話においてQおよびINFは意見交換よりも有意に発話比率が高かった ( $F(1,58) = 45.06$   $p < .01$ ) ( $F(1,58) = 25.58$   $p < .01$ )。また、意見交換会話においてOPは雑談よりも有意に発話比率が高かった ( $F(1,58) = 288.30$   $p < .01$ )。NM、EVには会話の種類間の有意差は見られなかった。そして、雑談会話における発話機能の出現比率の関係は  $INF > Q > EV > OP > NM$ 、意見交換会話における発話機能の出現比率の関係は  $INF > OP > Q > EV > NM$ であった<sup>2</sup>。

さらに、会話参加者と発話機能の関係については、下位検定の結果、NNSの発話においてINFはNSよりも有意に発話比率が高く ( $F(1,58) = 44.61$   $p < .01$ )、NSの発話においてはQおよびEVはNNSよりも有意に発話比率が高いことがわかった ( $F(1,58) = 30.46$   $p < .01$ ) ( $F(1,58) = 18.66$   $p < .01$ )。NM、OPには会話参加者間の有意差は見られなかった。そして、NNSの発話における発話機能の出現比率には  $INF > Q > NM$  および  $INF > OP > EV > NM$  という関係があり、NSの発話における発話機能の出現比率には  $Q > INF > OP > EV > NM$  という関係があることがわかった<sup>3</sup>。

この分析結果からは、雑談会話ではQおよびINFの発話機能が高く、上位カテゴリーでの結果と同様に、雑談会話は情報共有が中心となって行われている会話であることがわかる。その中で、NNSではINFの比率が突出して高いのに対し、NSはQとINF双方の発話比率が高く、加えてEVでもNNSの2倍近い値を示している。一方、意見交換会話では情報の合成・加工のための発話機能のうちOPの占める割合が高くなっている。OPの比率はNNS、NSともに同程度であるが、そのほかの発話機能では差が表れた。NNSではINFとOP、つまり情

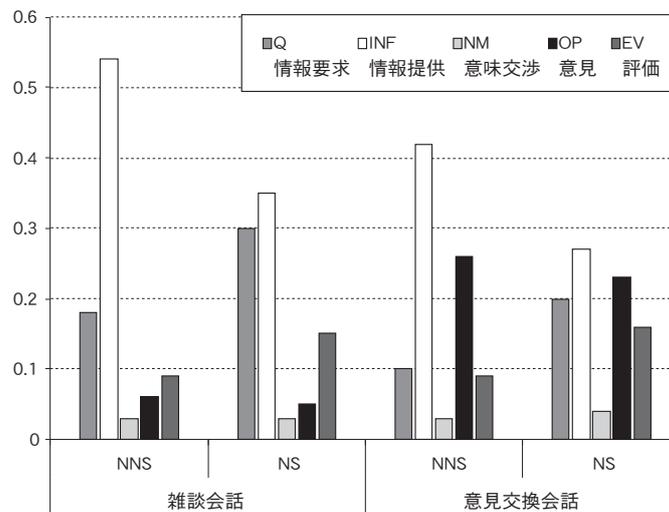


図2 発話機能別発話出現比率

報や意見の「送り手」としての発話比率が高いが、NSではINF、OPのほかにもQおよびEVの比率も高い。相手から情報を引き出したり相手の発話を評価する発話は、情報や意見の「受け手」としての発話と言える。意見交換会話のNSの発話は、送り手としての発話と受け手としての発話がバランスよく使用されていることがわかる。

つまり、NNSは雑談会話と意見交換会話で会話参加のスタイルが変わっていない。意見交換会話では会話の目的が変わり意見を述べる割合が高くなるものの、情報共有の段階を経て情報の合成・加工段階においてもNNSは主張を述べる側として会話に参加しており、NSの意見を引き出し、受け止めるという役割を十分に果たしていないことが窺える。

この点について、会話例を用いてさらに詳しく観察する。次の会話例は、NNS4とNS4による意見交換会話で、子供のころの習い事経験を基に、子供への教育方法について意見を述べ合っている場面である。

会話例)

- 1 NNS4 割と私は 何でもこうすんなり ああいいなあ h h h と 思う方だったんですけど はい ←INF  
でも小学校5年生 5年生か6年生で出会った英語の教室は結構インパクトがありまし  
て
- 2 NS4 え：：インパクトですか え どんなインパクト ←Q
- 3 NNS4 えっと あ 語学ってこんなに楽しいんだ：っていうのを ←INF
- 4 NS4 あ：：なるほど そのときにやっぱり出会って：より深めようみたいな感じに ←Q
- 5 NNS4 はい ですからやっぱりこう いろいろ経験：するっていうことは大事な：と思いますね ←OP
- 6 NS4 そうですね： 確かに ←EV
- 7 NNS4 はい はい 何でも万能になろうっていうわけではなく：うん こういうのもやってみて ←OP  
あ これは私に合わないんだとかもわかる機会になりますし： うん
- 8 NS4 そうですよ なんか満遍なくするっていうよりも： なんだろう自分に： 合う合わない ←OP  
得意不得意を：知るっていう機会でもありますよね 確かに
- 9 NNS4 そうですよ えっと 内田樹さんてわかりますか ←Q
- 10 NS4 いや：わからないです ←INF
- 11 NNS4 内田樹さんて あの フランス文学の先生でしたっけ 本があるんですけど (後略) ←INF

ここでは、NNS4が子供時代に英語教室に通ったことで新しい気づきがあったという経験を話し(発話1, 3)、適性を見つけるためには様々な経験をするのが大事だという意見を述べている(発話5, 7)。この一連の発話に対し、NS4はまず「え どんなインパクト」と相手の発言に興味を持っていることを示し(発話2)、続いて相手の意図していた発話内容を先取りして話し、経験談をまとめている(発話4)。そして相手の意見に同意を示し(発話6)、この同意を受けてNNS4がさらに具体的に意見を述べている(発話7)。この主張を受けて、NS4は同意にとどめることなく自分の言葉で意見を述べている(発話8)。この意見に対しNS4は、「そうですよね」と反応を見せるもののすぐに関連した他の話題を提供している(発話9, 11)。この会話例では、NSがNNSに対して話を促し、受け止めながら意見を述べている一方で、NNSは情報や意見の発信のみを積極的に行っているという様子が観察された。

## 6. 結果のまとめと考察

本研究では、意見交換への会話参加者の参加の様相を明らかにすることを目的として、研究課題1では発話の長さ、研究課題2では発話機能の比率について雑談会話との比較分析を行った。

発話の長さに関しては、先行研究と同様、意見交換会話では1回の発話が雑談会話と比較して長く、話者間の発話量の不均衡は見られなかった。発話機能の比率においては、雑談と意見交換では意見を述べる発話がNNS、NSともに増えるという点で異なるものの、どちらの会話においてもNNSは情報や意見を発信する発話が多く、

NSは発信の発話だけでなく情報要求、評価といった情報や意見を受信する発話も多いという特徴が見られた。

この結果からは、まず雑談会話と比較した意見交換会話の難しさが推察される。1回の発話における発話量が多いのは、抽象度の高い話題について意見を述べるためにまとまった分量の発話をしなければならなかったと考えられる。また、意見交換会話でも雑談会話と同様に情報共有のための発話が大部分を占めていたことから、意見そのものの難しさだけではなく、情報共有の会話と意見を述べる発話を繋げるということも難しさの要因ではないだろうか。

そして、非母語話者の会話参加という点では、本研究の対象者である非母語話者は1回の発話における発話量および意見を述べる量が十分であり、会話相手に対して必要な情報の提供や意見表明を行うことができていた。しかし、母語話者と比較して、情報や意見の受け手としての発話が不足しており、この点で指導が必要であると考えられる。非母語話者が母語話者の質問に答える形で会話が進んでいくというスタイルは、初対面会話を扱った佐々木(1998)で「インタビュースタイル」として指摘されている。本研究では、意見交換会話においてもこれが維持されていることが明らかになった。お互いの考えを深め合うための意見交換で一方の会話参加者からの情報発信が中心となって情報の共有が行われると、続く意見交換段階においてもそのリソースしか生かせないことになってしまう。岩田(2005)は「対称」という言葉を用いて、会話参加者が互いに同等な積極性を持って会話に参加することが話者同士の相互理解を深めるために重要であると主張しているが、本研究で見られたように情報の共有過程で話者の役割が固定化されてしまうと、意見交換会話の幅を狭める要因となってしまう恐れがあるのではないだろうか。また、Mori(2002)は聞き手が質問し、話し手が答えた後に表れる聞き手の反応を「第3の位置」と呼び、これが会話内容を左右すると述べている。意見交換会話においては、会話相手の意見を評価することは自分の立場を明らかにすることにも繋がり、続く意見交換の展開にも大きな影響を及ぼす。意見交換会話では、雑談会話と同様、またはそれ以上に相手の発話に対する反応や評価といった発話が重要になるのではないだろうか。その点においても本研究の非母語話者は不足であったと言える。

しかし、果たしてこれは非母語話者の日本語能力の問題としてのみ捉えられるべきだろうか。会話相手である母語話者が自ら進んでインタビュアー役となったために、必然的に非母語話者が受け身にならざるを得なかったということは考えられないだろうか。非母語話者、母語話者双方にとって充実した意見交換とするためには、非母語話者側だけでなく母語話者の会話参加への姿勢に対しても問題意識を持つ必要があるだろう。

## 7. 今後の課題と日本語教育への示唆

本研究の結果は、女性が対象であり、日本の大学の教室でデータ収集をし、母語話者はその大学に所属する学生であるという、限定された対象者や状況の下で出されたものであり、結果を広く一般化することはできない。今後はさらに、性別や年代、データ収集の状況を設定して広くデータを収集していく必要がある。そして、今後の課題としては、今回見られた情報共有の過程と情報の合成・加工段階である意見述べの発話がどのように繋がっているのかを分析し、やりとりの中での意見陳述の様相を検討していくことが挙げられる。また、非母語話者および母語話者が話し手として、聞き手としてどのように会話に参加しているか、さらに詳しく観察していく必要がある。

意見交換に関する教室指導としては、現在まで意見をどのように述べるかといった話し手としての視点からの指導が多くなされてきた。しかしながら、会話相手のいる意見交換では、相手の話をどう引き出し次の流れにどう繋げるかといった技術が重要な役割を果たす。今後は、意見の引き出し方や評価の仕方等、会話の受け止め手としての能力の養成にも力を入れるべきである。そして、やりとりの中で意見を述べるためには、意見の述べ方に関する指導に加え、情報を共有してそれを意見述べに繋げるという会話の流れを意識した指導が今後取り入れられるべきだろう。さらに、母語話者側へは、相手から話題を引き出すことに集中する言語ホストとしての意識から、対等な立場で会話に参加するという意識に変える必要があるということを伝え、ビジターセッション等、母語話者参加型授業の際にはその点に注意を払った指導をすることも考えられる。

このような指導が、より内容の深い意見交換を達成させ、中級学習者のコミュニケーション能力の向上に貢献することが期待される。

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、ご指導いただきました佐々木泰子先生、貴重なご助言をいただきました査読者の方に、心より感謝申し上げます。

## 【註】

1. 会話種類および会話参加者別の発話比率の平均値（標準偏差）は以下の通りである。

	雑談会話		意見交換会話	
	NNS	NS	NNS	NS
Q (情報要求)	0.18 (0.08)	0.3 (0.11)	0.1 (0.06)	0.2 (0.11)
INF (情報提供)	0.54 (0.11)	0.35 (0.12)	0.42 (0.14)	0.27 (0.12)
NM (意味交渉)	0.03 (0.03)	0.03 (0.03)	0.03 (0.04)	0.04 (0.05)
OP (意見)	0.06 (0.04)	0.05 (0.03)	0.26 (0.1)	0.23 (0.09)
EV (評価)	0.09 (0.06)	0.15 (0.06)	0.09 (0.07)	0.16 (0.08)

2. 雑談における発話機能間の単純主効果の結果は $F(4,232)=250.39$   $p<.01$ であり、 $Q>NM, Q>OP, Q>EV, INF>Q, INF>NM, INF>OP, INF>EV, OP>NM, EV>NM, EV>OP$ において1%水準の有意差が見られた。意見交換における発話機能間の単純主効果の結果は $F(4,232)=85.19$   $p<.01$ であり、 $Q>NM, INF>Q, INF>NM, INF>OP, INF>EV, OP>Q, OP>NM, OP>EV, EV>NM$ において1%水準の有意差が見られた。
3. NNSの発話における発話機能間の単純主効果の結果は $F(4,232)=166.92$   $p<.01$ であり、 $Q>NM, INF>Q, INF>NM, INF>OP, INF>EV, OP>NM, OP>EV, EV>NM$ において1%水準の有意差が見られた。NSの発話における発話機能間の単純主効果の結果は $F(4,232)=62.26$   $p<.01$ であり、 $Q>NM, Q>OP, Q>EV, INF>NM, INF>OP, INF>EV, OP>NM, EV>NM$ において1%水準の有意差が見られた。

## 【参考文献一覧】

- Brown, G. and Yule, G.(1983) *Teaching the Spoken Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mori, J.(2002)Task design, plan, and development of talk-in-interaction: an analysis of a small group activity in a Japanese language classroom. *Applied Linguistics*, 23(3), pp.323-347.
- Tannen, D. (2001) *You Just Don't Understand: Women and Men in Conversation*. New York: Quill.
- 岩田夏穂(2005)「日本語学習者と母語話者の会話参加における変化—非対称的参加から対称的参加へ—」『世界の日本語教育 日本語教育論集』15, pp.135-151.
- 浦光博・桑原尚史・西田公昭 (1986)「対人的相互作用における会話の質的分析」『実験社会心理学研究』26, 1, pp.35-46.
- 串田秀也・定延利之・伝康晴 (2007)『時間の中の文と発話』ひつじ書房
- 佐々木由美 (1998)「初対面の状況における日本人の「情報要求」の発話—同文化内および異文化間コミュニケーションの場面」『異文化間教育』12, pp.110-127.
- 中井陽子 (2003)「話題開始部で用いられる質問表現—日本語母語話者同士および母語話者/日母語話者による会話をもとに」『早稲田大学日本語教育研究』2, pp.37-54.
- バック・キャサリン (編) (1989) 日本語OPI研究会 (訳)『ACTFL—OPI試験官養成用マニュアル』アルク
- 一二三朋子 (1999)「非母語話者との会話における母語話者の言語面と意識面との特徴及び両者の関連—日本語ボランティア教師の場合—」『教育心理学研究』47, 4, pp.490-500.
- 藤本学・村山綾・大坊郁夫 (2004)「言語的・非言語的コミュニケーションを活用する社会的スキル向上の研究」『平成14, 15年度 日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書』pp.36-43.